出典の表示（著者年号方式）

文献の著者、出版年、引用している部分のページをコンマで区切って組み合わせ、全体をカッコでくくって出典を示します。たとえば（佐藤，2002，p. 21）などのようなかたちです。著者名を文中に出して不自然でない場合は、著者名をカッコの外に出してもかまいません。その文献のくわしい情報は論文末尾の「文献」セクションに書いておき、そこを参照すれば文献が特定できるようにしておきます。

- 複数の文献を 1 個所で引用する際には、セミコロン（;）で出典表示を区切ります。たとえば（鈴木，2001，p. 4 ; 佐藤，2002，p. 21）のようにします。
- 著者名は、通常は姓だけを書きます。ただし、同姓の著者が「文献」セクションにあらわれる場合には、フルネームで書きます。
- 共著の文献の場合は、著者名をナカグロで区切り、列記します。「久慈・斎藤（1985）」のような表記になります。4 人以上の場合は、4 人目以降は省略し、「ほか」「et al.」などとします。
- 同一の著者がおなじ年に文献を出版している場合には、年号に “a,b,c,...” のように小文字アルファベットをつけて識別します。たとえば「長友（2002a, p. 9）」などのようになります。「文献」セクションのほうでも同様に年号にアルファベットをつけて区別します。
- 引用する文章が 1 ページだけなら “p. ” をつけます。2 ページ以上なら “pp. ” をつけます。
- 文献中の位置を特定する必要が特にない場合は、ページは省略してもかまいません。

文献引用のサンプル

レポートは、誰に向けて書くべきものだろうか。もちろんレポートを読んで評価するのは教師なのだから、「教師に向けて書く」というのが模範的な答えではある。実際、学生向けのレポートの書きかたの手引き類では、最初に読者を限定して書きはじめることをすすめるのが一般的であった。たとえば木下是雄は「書くことに慣れていない人は、誰が読むのかを考えずに書きはじめるきらいがある〔……〕読者は、手紙、答案・レポート、研究費申請書などの場合には特定の人（原則としてひとり）である」（木下, 1981, p. 21）と述べ、対象となる読者を明確に意識して文章を書くようにすすめている。

これに対して、近年では、書き手の動機付けへの配慮から、むしろ不特定多数の読者を意識して書くことを進める立場に立つ人が増えてきている。そのような立場の代表として、向後千春の論考をとりあげてみよう。向後は、ほとんどの学生はレポートを書くことにやりがいを感じていないと指摘し、読み手がひとりしかいないと思うから、落第点のつかない当たりさわりのないレポートが続出することになるのだと書いている（向後, 1999, pp. 89–90）。そして、こうした状況に対応するため、書き手の学生に向けてもつぎのような助言をのこしている。

> 自分が書いたレポートのコピーを残しておこう。 自分の著作のなかの 1 つとして多くの人に読んでもらえるようにするのだ。〔……〕何かの文集でもいいし、雑誌でもいい、また自分の Web サイトに載せてもよい。レポート提出時に、これを読んでもらう人々を心の中に思い描いて、レポートを書くのだ。いま目の前にいる読み手だけではなく、そのうしろにいる洗剤〔ママ〕的な読み手のために書く。そうすれば、あなたのレポートはより価値の高いものになる。（向後, 1999, p. 93）

このような対策を、授業のなかに制度として組み込むこともできる。提出されたレポートを編集してまとめ、その授業の報告書をつくる、といったやりかたである。大学によってはこうした刊行物に力をいれているところもある。これは確かに学生の動機付けの手段としては有効である。しかし編集と印刷に多大の手間と費用がかかるから、なかなか採算がとれない。

ここ数年のコンピュータ・ネットワークの進歩のおかげで、同等のことがずいぶん楽にできるようになった。最初から HTML 形式でレポートを書いてもらって、Web ページとして公開するのである。田中（1999a）はそうした授業の実例を報告している。これは大学 1 年生を対象とした情報処理入門の授業である。HTML の基本的な書式については授業中に簡単に触れて

文献

木下是雄（1981）『理科系の作文技術』中央公論新社.

向後 千春（1999）「レポートをデザインする」栗山次郎 (編) 『理科系の日本語表現技法』朝倉書店, pp. 89–110.

田中重人（1999a）「身の丈にあったレポートを」『大阪大学情報処理教育センター広報』16, pp. 15–18.